

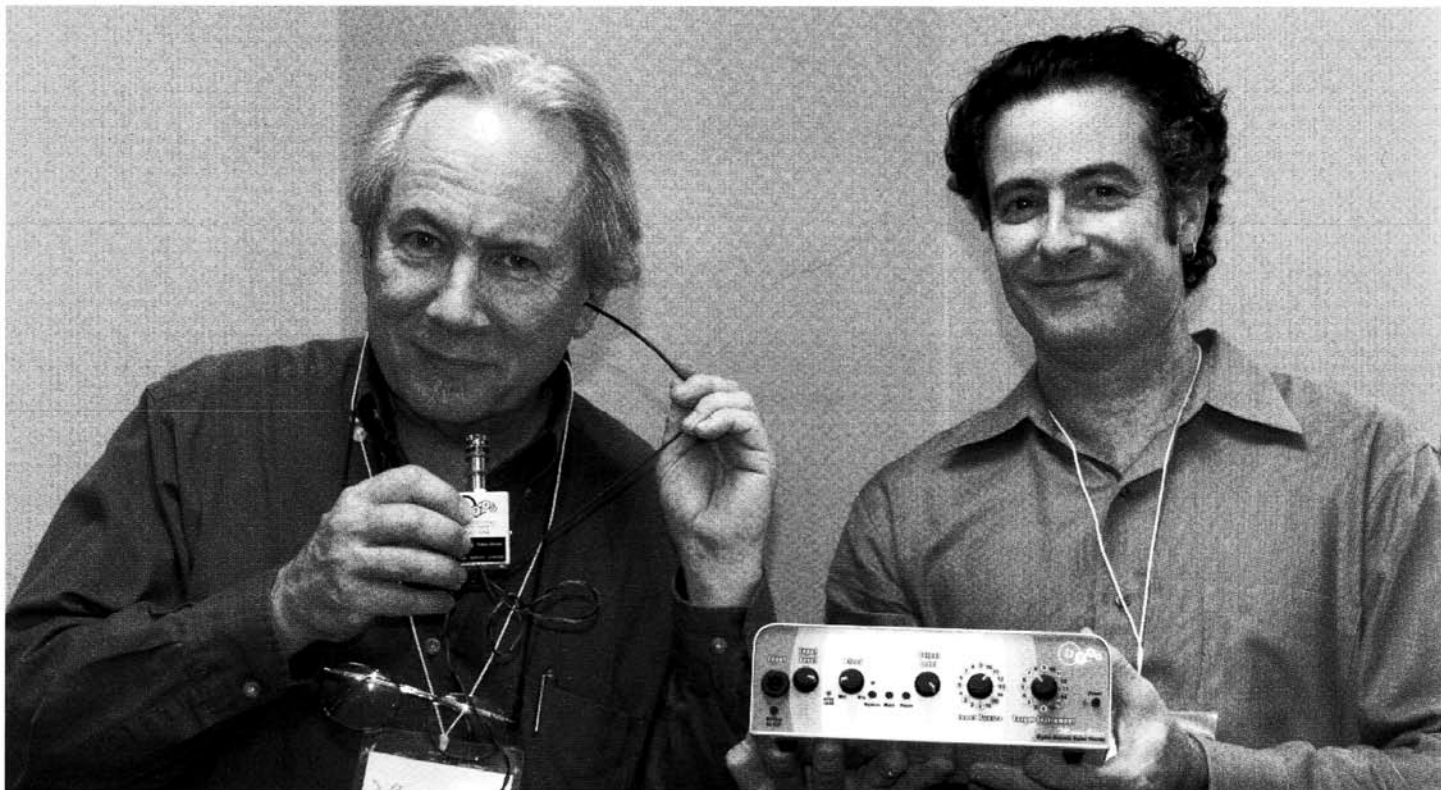
“With Respect To Acoustic Tone”

リック・ターナーとダンカン社のコラボレーションから生まれた、究極のアコースティック・アンプリフィケーション **D-TAR**

Timber-Line Piezo Cable Pickup & D-TAR Mama Bear Digital Acoustic Guitar PreAmp Rick Turner & Evan Skopp (Executive VP, Partner) Interview

取材●大塚康一 協力●早川岳志

ステージでアコースティック・ギターの音をより自然に再現することは、多くのギター・プレイヤーにとって悩みの種であり、会場の大きさに合わせてピックアップ、マイク、プリアンプなど色々なシステムを組み合わせて試行錯誤しているというのが実態だ。2年前にリック・ターナーの工房を訪ねたとき、セイモア・ダンカンと開発中の新しいピックアップについての話を聞き、その後の進展に注目していた。このたび日本の代理店であるシェクターの招きによって、楽器フェアで新しいD-TARの製品をプロモーションするため来日したリック・ターナーとエヴァン・スコップから、その画期的なピックアップとプリアンプについて話を伺った。



—最初に、D-TAR設立のきっかけを簡単にご説明頂けますか。

Rick: 2001年のNAMMショーで、セイモア・ダンカン主催の「アコースティック・アンプリフィケーションの将来を語る」というミーティングにエヴァンが私を招待してくれたんだ。

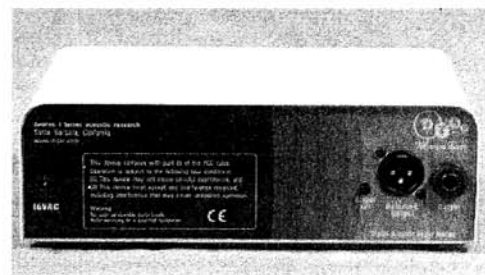
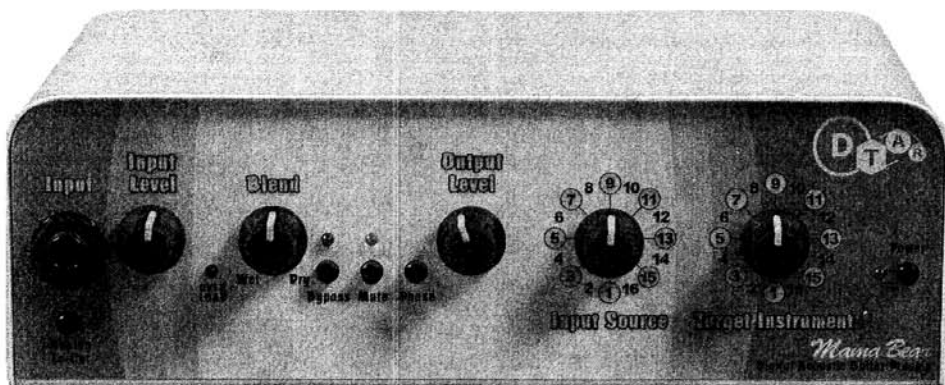
Evan: それは、アコースティック・ギターのエキスパートから意見を聞いて、アドバイザー集団を作るというアイデアでね、そのときリックがプレゼンテーションした新しいアイデアに我々はすっかり魅せられたことから、アドバイザーを何人も雇うのを辞めて、D-TARを設立したんだ。D-TARとはDuncan/Turner

Acoustic Researchのことだよ。アコースティック・ギターのサドルの下はピックアップを装着するには最適の場所だけど、マイクの音に比べて音がシンプル過ぎるから、それを調整するためにギター・プレイヤーはピックアップとマイクをブレンドしたり、様々なEQを使ったりしているわけだよ。リックはデジタル・テクノロジーを取り入れ、ピックアップによって失われていたアコースティック本来の複雑なボディーの響きを見事に復元したんだ。

—Mama Bearのデジタル・テクノロジーの話に入る前に、新しいピエゾ・ピックアップのTimber-Lineについてお聞きますが、

これは従来のものとどこどころが違うのですか？

Rick: 2つの大きな違いがあるんだ。ハイランダーを設立してピエゾ・ピックアップの開発に携わっていた時に、新しいピエゾ・ケーブルを捜していたことは以前にも話したけど、当時日本のNTKという会社が作っていたケーブルを見つけた。今回のケーブルはそれとは違ったものだけど、コンセプトは同じものでね。断面が丸いセンター・コンダクターを、その形に合わせて丸く削ったブリッジ・サドルのスロットにピッタリと装着するんだ。これによってピックアップの上下だけで



ヴィンテージ・マーティン&ギブソン、有名ルシアー作のギター、リゾネーター・サウンド等など、各種アコースティック・ギター・サウンドのサンプリング音を詰め込んだデジタル・アコースティック・ギター・プリアンプ“Mama Bear”。

はなく360° 方向からの振動をピックアップすることになり、ギター本来の複雑なシグナルを拾うことができ、ピエゾ特有のハードな音を和らげた優しいトーンを得ることができるようになった。よくピエゾの音を“quack”（アヒルなどのガーガー鳴く声）と表現するんだけど、私はこのクワック音はピックアップの瞬間的な高出力のスパイク歪みが原因だと考えて、ボールベアリングをピックアップに落とすという実験を試みたら、何と瞬間で100Vと計測されたんだ。もちろんギターでは100Vも出すことはないけど、これでは電源が9Vでは全然足りない。ギターのピークは12~15Vだと考え、18Vに設定することによって2倍のダイナミックレンジが得られ、より高いヘッドマージンが確保できたために、このクワック音をなくすことができたというわけ。

— 電池は9Vが2本ではなく、単三の電池が2本ですね。

Rick: D-TARは顧客の意見に常に耳を傾けていてね、9V電池2本ではギターが重くなってしまったという意見だった。そこで、単三電池2本の3Vを6倍の18Vにステップアップしても、250時間も持つサーキットを作ったんだ。

— ケーブルをサドルとブリッジの間に入れるわけですが、サドルの下も丸く削るのですか？

Rick: 一番簡単なのは、従来のピエゾ・ピックアップの取り付けと同じで、ブリッジのロットとサドルの下に手を加えずにフラットのまま装着する方法。これでも充分優れた音を得られるよ。二番目が一番人気のある取り付け方で、ブリッジのロットの装着面をケーブルに合わせて丸く削ってフィットさせるんだ。そしてさらに完璧にフィットさせたかったら、サドルの底も丸く削ってケーブルに合わせるようにする。

— 多くのメーカーがピエゾとマイクをブレンドしたりしていますが、D-TARは全てピエ

ゾだけでナチュラルな音を出すというコンセプトなのですか？

Rick: その通りだよ。でもこれはステレオ・ジャックに別のパワースイッチが付いているので、アーティストが自分の好みや必要に応じて、色々なものを付け足すことができるようになってるんだ。私は個人的にはTimber-LineにMama Bearを組み合わせたのがベストだと信じているよ。Mama Bearを併用することにより、プレイヤーがマイクやEQを使って得ようとしているナチュラルな音を、フィードバックなしで得ることができるんだよ。

— Mama Bearのコンセプトと、そのユニークな機能をご説明いただけますか？

Rick: Mama Bearはデジタル・テクノロジーを駆使して、ピックアップを通すことによって失われた木と空気感のあるサウンドを補うというものだ。アコースティック・ギターの音は、丁度池に小石を投げた時に起こる波紋のようなもので、振動が素早いものもあれば、時間が掛かるものもある。それらの波長とタイミングが複雑に絡み合っ、アコースティックの音を作り上げている。波長だけでなくタイミングも絡んでいるので、3次元の空間でコントロールするわけだから、アナログでは不可能なんだ。1988年から89年にかけて、ギブソンの研究所の責任者だった時に、当時のチーフ・エンジニアがマーシャルのサウンドをIBMのパソコンでサンプリングしているのを見て、これをアコースティックに応用できないか考えたんだ。それからずっと、デジタル技術でアコースティックのサウンドをプログラムすることを夢見ていた。このMama Bearは私のオリジナルのコンセプトに、限りなく近いものだよ。Mama Bearでは、ターゲット・セレクターに16種類の異なったギターから木と空気感のサウンドをサンプリングして取り入れ、さらにインプット・セレク

ターに16種類の入力フィルターを用意して、ターゲット・セレクターと組み合わせることによって、アコースティック・ギター本来の複雑なサウンドを得ることができる。ギターのサンプリングのレコーディングは面白かったよ。南北戦争時代のマーティン・ニューヨーカー、1930年のOM、1934年のD-28、1938年のD-18、1924年ロイド・ロアーのL-5、1928年のL-5、ローレンス・ジュバーのマホガニーのOMとローズウッドのOM、ジェフ・トラゴットやマキャリスターなどのカスタム・ギター、デュボンのマカフェリ・スタイルのギター、そして1927年と32年のレゾネーター・ギターまで試したんだ。

Evan: Mama Bearの中には合計\$250,000以上のギターのサウンドが入っていることになるね。プレイヤーはMama Bearを通すことによって、これら16種類のグレートなギターのサウンドを得ることができるのさ。

Rick: まったく同じサウンドとは言えないけど、それらのギターの音に近いハイブリッドな音だよ。16種類の異なったギター・サウンドがある上に、インプット・セレクターとの組み合わせにより、さらに多くのサウンドが得られるから、色々試して新しい使い方、新しいサウンドを見つけて欲しいね。

Evan: この機械の中にはとても複雑なコンピューター・システムが入っているわけだけど、操作は簡単にできるようにしたんだ。インプット・セレクターを自分の使っているピックアップに合わせた後は、ターゲット・セレクターで音を選ぶだけでOKだよ。

Rick: 最近Mama Bearのユーザーがウェブサイトに書き込んでくれるんだけど、Mama Bearのおかげでライブのセットアップがシンプルになったというんだ。コーラスやリヴァーブなどのEQを使わなくても、Mama Bearがあれば全て求めていた音を得られると言ってくれているよ。